

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.53 2010年7月17日発行  
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369

## 1年ぶりに復帰しました

—気を引きしめながらできることを少しでも

瀬谷 やほこ

「非ホジキン節性濾胞辺縁帯 B リンパ腫」という難しい名前の癌になり1年間休団、皆様の励ましのおかげで今回の『鮠』公演に出演することができました。ありがとうございました。

復帰して取り組んだ作品が真船豊の『鮠』。なんとも魅力溢れる作品です。なんていうのは今だから言えるのですが、第一印象は不気味などろどろした作品で、私の好きな作品ではありませんでした。真船豊ならば喜劇なのに、およそ喜劇とは思えないのです。観客に何を届けるのか分からない、今までに経験したことのない作品でした。これは一体悲劇なのか、喜劇なのか、疑問でした。

とにかくリアルに創っていくしかないと思腹をくくって超リアリズムで創っていきました。そのうち、ある場面が稽古の中で、とても面白くなってきます。欲と欲とがぶつかり合い、変なきしみがでて、それがなんともおかしいのです。私が出る場面でも演出の内田さんがクスクス笑ったりし始めました。こんないやな人間いないと思っていた役者の私の好き嫌いなどおかまいなく、あのひと癖もふた癖もあるあの人達が蠢きだしたのです。

よし、喜劇だ。真船豊、ただ者じゃな

い。私は読みの浅さを恥じました。良い戯曲とは私のような凡人が一読したぐらいでは分からない奥の深いものなのだ。人間丸ごと善いも悪いもひっくるめて人間なのだ。作者はこの登場人物達をこよなく愛していたのだろうか、そしてまた、それを捉まえられたのは超リアルに創ってこそだったのだと思うのです。ウソはやっちゃいけない、感じているふりをしてはいけない、そんな偽物の演技など受け付けられない手ごわい作品だったということでした。そしてそれは、我が劇団の創造方法をもってして創り得たのだろうとも思うのです。リアリズム演劇万歳！

皆さんから「大丈夫、元気じゃなあい」と言われるとついつい気を良くしてしまいます。でもまだ治療中の身です。そのことを忘れてまた休むなんてことがないよう、気を引きしめながらできることを少しでもよいのでやっていこうと思っています。どうぞよろしくおねがいします。

(劇団員)



「鮠」の舞台① (撮影 長坂クニヒロ 以下同)

# 鋭く角の立った演技を 志したい

若菜 とき子

51年目を迎えて、役作りについて、つづけて考えてみよう。

役作りへの不足と、疑問。

演劇は、ともすると個人の欠陥や弱点が仕事の中に埋没されて識別できなくなってしまう。舞台的しぐさではなくて舞台的生活、劇的生活を創造することが目的である。内的動機による行動についてはいろいろとってくれるが、また大切にされてきているが、発声や、アーティキュレーション、舞台上での身体のやわらかさという基礎的な訓練の不足や、行動の未整理(強調や、無駄を整理する)の浅さが目立っている。

1934年生まれ、76歳、<sup>せりふ</sup>科白を一字一句違えずに記憶する困難さは並ではない。しかしそれを自分のものによって行動の路線と課題への見通しができるのではないか。

今回「いたち」の討論の中で読み合わせなしの身体的からの役作りを、不完全ではないかとの意見が出ていたが、最初のデッサンから役作りへの発展としても考えてもよいのではないかとの意見も出た。

基礎的訓練の不足は、役作りへの過程を演技者個々にまかされ演技者および演出者に劣等感、孤独感、不

安を感じさせてしまうのではないか。自在に使える音量と呼吸法は、役作りに必要と改めて認識する。このことはある程度の役作りへの開放感へとつながるのではないかと考える。

事柄に絶えず新鮮に接し、感動することのできる素直さを大切にし役のあり方に個人として横着な怠け者であってはならない。それは役作りの上で他人との隔たりを拡大するものだ。

劇団創立期には、集団を優れたものにするには、自身の人間性に対する厳しい不断の努力を続けなければならない。「俳優は人間の宝石になるものだ」新劇の父小山内薫の言葉「芸術家は自分の中に美学者を育てなければならない」スタニスラフスキーの言葉を座右において、これでいいということなしにかみしめる必要がある(黒沢参吉、わが演劇遍路より)をどこかに捨ててしまったのではないだろうか。

「炉あかり」から始まり、第3回公演「マーシェンカ」労働会館1962年5月18日～4ステージ1200名の観客、創立メンバー、新世代に1～2期生(マーシェンカに若菜とき子)という形になり互いの間に共感と理解のかけ橋にしようというドラマの課題はそのまま劇団の願望を反映していた。その観客のひとりが現在劇団の幹部として活躍していることは私にとっての勲章である。

最後に、免疫学者、「能」作者である多田重夫先生が残した言葉。「科学者はシェークスピアであれ、創造者はアインシュタインであれ」。病にたおれても創造することの楽しさを見つめていた言葉が痛い。そのような心意気を持ちたい。役に対する圧を鋭く角の立った演技を志したい。

(劇団員)

「鮫」の舞台②



# 一度はあきらめた芝居だが

上村 健太郎

大学受験に失敗して何もかもがいやになり、新しい世界を切り開きたいという思いから上京しました。今から約20年前の春のことです。新しい世界といっても当時は漠然としていて、今思えば現実からの逃避に近いものでした。迷っていてもしょうがないと思ひまして高校のときに見た某劇団をたずね養成所に飛び込みました。しかし芝居がどうしてもやりたくて入ったのではないですから半年であっけなく挫折しました。

それからはフリーター生活になり、将来に対する目標も何もない、ただ流されるままに荒れた生活を送っていました。あと一步で社会から完全に脱落するところ、養成所時代の恩師から連絡がありました。私のことを陰ながら心配してくれていたようです。新宿で会うと「顔色が悪いな。ちゃんと飯食ってるか?」と言われ食事に誘ってくれまして、いろいろ話を聞いていただきました。別れる際に「君自身がやりたいことを素直にやればいいんだよ」と堅い握手で別れました。

胸が一杯になりましたが、何かが吹っ切れたようで、清々しい気持ちになったことが記憶に残っています。

そのことをきっかけに再び一念発起して大学を目指し今の会社に就職しました。生活も安定し仕事も充実してきましたが何か物足りません。対人関係や社会問題との関わりなどで、正面から熱くぶつかった自分がここ数年、何事も要領よくこなすだけになっていました。時間に追われる生活の中で自分の大事な何かがジリジリと失われていくような悶々とした日々を過ごしていました。

そのとき、職場の労働組合が主催した憲法劇に関わることになり、自分という存在を丸ごと相手とぶつけ合う芝居の魅力に取りつかれました。どうせやる

なら、労働者の熱い思いを表現しようとしている劇団に入ろうと思い、インターネットのHPを頼りに京浜協同劇団の門を叩きました。3月に研究生として入団して以来、東京芸術座の「蟹工船」、そして今回の「鮫」と、二度の舞台に立つというチャンスにも恵まれました。自分としては「一度はあきらめた芝居の道だが再び挑戦しよう! どんないやなことや苦しいことがあってもあきらめずに5年はがんばろう!」をモットーにがんばるしだいです。劇団ならびに文化の仲間の皆様、これからもよろしくお願いします。

(劇団員)

## 50周年に思うこと

中村 久生

文化の仲間の女性スタッフから「1200字原稿依頼」が舞い込んできた。そう仕向けた黒幕の見当はついてはいるがそれはともかく、送られてきた『文化の仲間』51および52号によれば、劇団は創立50周年を迎えられ、ますますのご発展、まずは大慶至極。

ところで、私は今、「コープかながわ(生協)」の一総代なのだが、実は、廃棄すべき売れ残りの肉をローストして店頭販売を続けていた事実が発覚した。戦後間もない何もかも不足し不安定な世情の中で、幼い子



「鮫」の舞台③

#### (4) 「鮠」感想・事務局から

を抱えながら若いママさんたちが「食の安心」「家計の安心」「社会的責任」をモットーに、まさに手作りで育て上げてきたのが『生協』である。それが今は122万人の組合員を擁する大組織に成長し、当然ながら手作りの小組織の集合体は近代的経営組織に改革されたが、同時に「組織の論理」が前面に出て、人間性に裏付けされた人間関係が後景に退く傾向が発生した。そのはざままで生じたのが今回の不祥事なのだが、その辺の人間模様は、フト気付いたのだが「鮠」の世界と共通しているような気がする。

時代の移り変わりの中で、いろいろな要素に対し取捨選択を誤りなく行うのは並大抵のことではない。

かつて中曽根元首相は、日中関係を睨んで、「三世代100年、一世代半50年」と言われた。つまり「侵略と暴虐の限りを受けた中国国民はその恨みを100年間忘れないが、加害者の日本は50年経ったら忘れ



てしまう」という意味なのだが、いずれにせよ「50年」という歳月の哲学的意義と重みは重かつ大である。

『文化の仲間』が、その辺りの緊張感を含んだニュアンスで彩られたら是非読ませていただきたいものである。駄文ご容赦。  
(横浜市旭区在住)

## 文化の仲間の総会を9月23日（木・祝日）に開催します

文化の仲間事務局 山木 健介

総会で特別講演を行っていただくゲストは、中村雅雄さんです。中村さんは元教師でスズメバチの研究者です。川崎の自然についても造詣が深い方です。

文化の仲間の会報が50号をこえましたので、1号から50号を1冊の本にしたいと考えています。総会ではその予算の問題や来年度の文化の仲間の取り組みなどを話し合います。後日、総会のご案内をお送りしますので、ぜひご参加のほどをお願いします。

\* \* \* \* \*

### バザーを始めました

文化の仲間の会報も50号をこえましたので、1号から50号までを1冊の本にします。その予算確保の一環として、公演や催物の際にバザーをやることになりました。売り上げは会報冊子化資金と劇団の創立50周年稽古場カンパとで折半します。バザーの品物は、無料提供・持ち帰れる大きさの物・腐らない物です。バザーへの品物の提供、あるいはバザーでのお買い上げをよろしくお願いします。

### 8月に平和の催し物を開催

8月28日（土）と29日（日）に平和の催し物をやろうと、文化の仲間と劇団の共催で実行委員会を立ち上げました。11月～12月に公演されるドイツの画家であり彫刻家であるケーテ・コルヴィッツを主人公とした和田庸子さん（劇団員）の創作劇のプレ企画として行う予定です。詳細は検討中ですが、28日に古澤潤さんの絵の展示会を行い、29日には絵が展示されている中でイベントを行うことを考えています。イベントとしては、古澤潤さんと和田庸子さんのトーク、朗読、演奏、歌を1時間半くらいの時間で開催することを検討中です。おもしろいものやろうと実行委員一同わいわい言いながら内容を詰めています。ご期待ください。

# 「心がふるえています」

和田 庸子

「パン！」というケーテ・コルヴィッツのリトグラフ（石版画）を見たのは、25年前である。

必死にパンをねだり、母親の衣服にしがみつく兄妹を、無言で振り払おうとする母親の背中……。まるで、昔のモノクロ映画の一場面を見るようにその絵は、私の気持ちのなかにすべりこんできた。子どもたちの半泣き声や、母親の切なさ、動く空気、描かれていない足元の床、物音などが一瞬におしよせてくる。私は、その場で「ケーテ・コルヴィッツ版画集」を求めた。これが、ケーテ・コルヴィッツとの出会いである。

こんなに「絵」によって、感情を揺さぶられたのははじめてだった。というより、子どものころから「絵」は全く関心なく、「図画」の教科書で「静物」の絵を見る度に「花瓶や果物がころがっているサマを描いてなにが面白いんだろう」とか、写生に行かせられると「写真を撮ってすませたい」と思うクチだった。

さて、気がつく「私はケーテ・コルヴィッツのことを芝居に書かなければならない」と思いこみ始めていた。まず、そのことを忘れないように、その後生まれた娘に「ケーテ（けゑて）」と名まえをつけた。モチロン父親の同意は得た。よしと。巷には、ケーテに関する本も資料もなにもない。やっぱり国会図書館か？ あった、あった。戦後すぐに出版されたケーテの日記の抜粋と、人と芸術を紹介する著作計2冊、マイクロフィルム化される直前だった。私はあわてて、書きうつしたり、コピーをとらせてもらったりした。

そうこうするうち、1992年に、大々的な「ケーテ・コルヴィッツ展」が東京や神奈川近代美術館などで開催され、もしかしたら「ケーテ・ブーム」がやってき

たのではないかとおどろかされた。文化の仲間の故・田島紳さんとケーテの話をしたのはこの頃である。「黒さんも陣ノ内鎮さんもケーテが大好きだった」と聞いて、ますますその気になっていったのはたしかである。

恐るべきことに、私には芝居を書いた経験も、版画技術の素養はモチロン、ドイツ国に対する知識もなんにもなかった。

それにもかかわらず、いやそれだからこそ、書こうという目標は長期間不動だったのである。

2年前から、具体的に「書く」作業にとりかかった。そのとたん、予期できなかった新たな困難に直面した。

苦しい呼吸と嗚咽に襲われるのである。毎日号泣せずには過ごせないのである、いいオトナが。それは、おもに、次男ペーターが死んだ事実と、ケーテの諸作品を見るときに感じざるを得ない、激しい感情がそうさせるように思う。1稿2稿と苦しまぎれに書きあげる度に自分がよれよれボロボロになっていくような気がした。私は、今一番老けているだろう。（当たり前か）ケーテは18歳で戦死したペーターの追悼像を完成させるのに18年かかっている。人や何かを思うということは、こういうことなのだろうか。

はっきり言えるのは、ケーテ自身はそれらのことから、目をそらさず逃げないで生きた、ということである。その結果が「作品」なのだ。

「書く」という旗頭を恥も外聞もなくかかげたおかげでケーテを愛する人々と何人も出会うことができたことは、思いがけない倖せだったがそれはまた別の機会に書いてみたいと思う。

2稿を読んでくださった杉本孝司さんは、「ケーテ・コルヴィッツが抱えている問題は、魅力的です。私にとって、またわれわれにとって」と話してくれた。3稿の課題はさらに大きくなった。9割方終わりに近づいているとはいえ、これが「上演台本」になるには「まだなにかが書けてないぞ！」と思いつづけている今日この頃です。（2010年6月28日）



京浜協同劇団 第81回公演

種子を粉にひいてはならない

# 黒と白のピエタ

作 和田庸子 演出 杉本孝司（東京芸術座） 音楽 安達元彦

日程 2010年11月26日（金）・27日（土）・28日（日）

12月 3日（金）・4日（土）・5日（日）

会場 スペース京浜（京浜協同劇団稽古場）

◎詳細は決まりしだいお知らせします。

京浜協同劇団 〒212-0052 川崎市古市場2-109 TEL 044-511-4951

FAX 044-533-6694 E-mail: keihinkyoudougekidan@nifty.com

二つの世界大戦で、息子と孫を失ったドイツの女性画家ケーテ・コルヴィッツ。その人生は、悲しみと情熱、そして愛にあふれていた。

◎文化の仲間通信◎

◆第28回 みんなでつくった平和公園 みんなでつ  
くろうコンサート 2010

日程 7月18日(日) 17:00 開演

会場 中原平和公園 野外音楽堂

入場無料 参加協力券 800円

出演 合唱まあ〜どれ・さいわい/コーラアゼリア/  
高津コーラス小組らら/中原うた小組みそら/合唱  
団いちばん星/神奈川合唱団/合唱団きずな/国鉄横  
浜うたう会 独唱松本良江/吉川敏男 ハンドベルね  
ぎぼうず サックス SAX-モード 和太鼓川崎太鼓仲  
間響 トランペット松平晃/とらんぺつとぼうず ア  
コーディオンアコーディオン神奈川合同 マジック大  
多和国男 アンサンブル春の風/ふえーん/アンサン  
ブル風 ほか

中原平和公園が生まれて28年、今年も平和のハー  
モニーがこだまする!

問合せ 松平 晃 044-411-6402

柳沢明信 044-422-5638

◆第5回 かわさき演劇講座 2010

日程 7月24日(土)~25日(日)

会場 スペース京浜(京浜協同劇団稽古場)

参加費 大人1500円 高校生以下500円

定員 50名(小学生以上)

講師 大嶋恵子(秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場)

申込方法 電話・葉書などで、住所・氏名・年齢・連  
絡先を明記の上、「かわさき演劇まつり実行委員会」  
まで。

問合せ・申込み 実行委員会(川崎演劇協会気付)

川崎市幸区古市場2-109 電話044-511-4951

演劇にはいろんな「発見」が詰まっています。さて  
それはいったいどんなもの? 来て、見て、さわって、  
探してみてください。

◆川崎市民劇場第297回例会 劇団青年座公演

妻と社長と九ちゃん

作 鈴木聡/演出 宮田慶子/出演 増子倭文江・山  
野史人・岩崎ひろし ほか

日程 8月1日~7日

会場 多摩・宮前・幸の各市民館とエポック中原

時は昭和から平成へ。社長の死後の九ちゃんと家族  
の思惑が揺れ動く昭和文具店……。

問合せ 川崎事務所 044-244-7481

溝の口事務所 044-855-5916

◆かがり火の中の和太鼓コンサート in 築田寺 III

出演 友野龍士(和太鼓)/無限(和太鼓)/鈴木加  
奈子(トロンボーン)/川崎太鼓仲間響/和太鼓集  
団きらり

日程 8月22日(日) 17:00 開演

会場 築田寺(町田市忠生2-5-33)

料金 一般2000円 小・中、障がい者1000円

幼児無料

幻想的な夏の世のスペシャルコンサート 3回目。

和太鼓とトロンボーンのコラボをお楽しみください。

問合せ 050-3529-5506

申込み 山本 090-3206-0283

◆まあ〜どれ・さいわい 第5回コンサート

光れ! いのち そして 平和

指揮 山寺圭子/ピアノ 山内千晶

日程 9月26日(日) 14:00 開演

会場 ミューザ川崎市民交流室(JR川崎駅徒歩1分)

演目 サウンド・オブ・ミュージックよりドレミの歌、

エーデルワイス/無言館新シリーズ ほか

参加協力券 800円(全席自由・コーヒーつき)

問合せ 新日本婦人の会幸支部 044-541-3128

◆第4回 <弾談の会 ぴあ〜の> 公演

樹・いのち・音 一生命の島 屋久島一

ゲスト 長井三郎 ピアノ 鈴木たか子

日程 10月3日(日) 午後1:30 開演

会場 杉並公会堂小ホール(03-3220-0401)

お話と歌「生命の島 屋久島」(長井三郎) 歌「一  
本の樹」など

ピアノ 樹の組曲(シベリウス)/組曲「木」(岡田京子)  
ほか

会費 会員本人2500円 一般3000円

問合せ 市原 0422-55-4767

●花火納涼会、今年も劇団の屋上で開催●

東京都大田区が毎年8月15日に催し物と花火を開  
催していますが、それに便乗して劇団稽古場の屋上で  
花火を見ながら劇団員と文化の仲間の交流をはかる花  
火納涼会を開催します。

日程 8月15日 午後6時半ころから

花火打ち上げは7時20分~8時10分

会場 京浜協同劇団屋上 会費 1500円

雨天で花火が中止の場合は、屋内で交流会を行いま  
す。参加をお待ちしています。

■文化の仲間ギャラリー■

竹間テル子⑧

